

子どもに関わる若者ボランティアセミナー（ボラ☆セミ）

神奈川県立青少年センター指導者育成課 清水 功

「気がついたら、もっともよい方法で、自分から行動する」とは、平成9年まで青少年が自ら成長する場であった「神奈川県立青年の家」で語り継がれてきた言葉であり、「ボランティア・スピリット」と言い換えることもできる。当時、多くの若者（学生や社会人）が、その言葉を胸に子どもに関わるボランティア活動に取り組んでいた。それから20年以上が経ち、若者を取り巻く生活習慣や社会環境、考え方などは、時代と共に変化してきた。本稿では、子どもに関わるボランティアの研修を紹介しながら、研修から見えてくる今も昔も変わらないボランティア・スピリットを紹介する。

1. 「聞いたことは忘れる、見たことは覚えているかもしれない、でも体験したことはわかる」

昨今、子ども・若者は、生活体験、社会体験、自然体験等の実「体験」が不足していると言われて久しい。若者を取り巻く生活習慣や社会環境の変化によりその機会は少なくなり、自己肯定感やコミュニケーション能力の低下等、子ども・若者への課題が挙げられている。

古代中国の思想家が、「聞いたことは忘れる、見たことは覚えているかもしれない、体験したことはわかる」という言葉を残した。とてもシンプルな言葉ではあるが、実際に様々な体験をした者にとっては、その言葉が持つ意味を容易に理解することができ、その重要性を感じることができると考える。

当センターでは、全ての指導者育成の研修で、多様な体験学習の機会を提供し、その「体験」を通して、自ら気づき、考え、解決する能力を身に付けることを促している。そしてその経験が少ないであろう若者（学生）には、様々な体験を通して学びを深め、やがて地域社会等で様々な活動に主体的に参加し、社会性をもって自己実現を図ることができる大人へと成長してもらいたいというメッセージも込められている。

2. 通称「ボラ☆セミ」とは

「子どもに関わる若者ボランティアセミナー（通称：ボラ☆セミ）」は、10年以上の歴史があり、年度によって事業内容を見直しながら、子どもに関わるボランティア活動に興味のある学生や社会人を対象に、毎年20人近くが集まる自主企画・運営型の研修を展開している。

近年においては、毎年1月に開催される青少

年センター主催の日帰りイベント「子どもフェスティバル」の体験ブースの企画や運営を行っている。そしてその活動を通して、イベントの企画や運営の基礎、子ども達への対応力等を身につけ、スキルの向上を図ると共に、そのスキルアップを通じて、各地域での青少年育成活動の普及拡大を目指した研修となっている。

活動は、10月からフェスティバル当日の1月まで全5回、その間も必要に応じて集まる機会を設け、毎月1回程度の活動を展開し、自主的に体験ブースを企画運営するまでに至る。

- 第1回：イベントの見学、体験ブースの企画
- 第2、3回：体験ブースの企画、リハーサル
- 第4回：前日準備、リハーサル
- 第5回：体験ブースの運営

3. 「気がついたら、もっとも良い方法で、自分から、行動する」

若者の生活や取り巻く社会の中で、問題意識（気にすること）を持つことは多分にあるが、まずそこに気づくかどうか、そして気づいたらどのような方法で自ら行動できるのか。それがなかなか理解できず、理解できてもどのように対応してよいかわからずに、行動に躊躇する。



企画ミーティングの様子

しかし、研修では、「体験」を通してそのような考え方や取り組み方を学べるようにしている。

実際にイベントやブースの内容を①企画し、②体験して、③内容をふりかえり共有し、分析して、④また考えて再び体験をするといった体験学習のサイクルに基づき展開をしている。

この「体験」による学習により、若者の心に「気がついたら、もっともよい方法で、自分から行動する」こと、即ちボランティア・スピリットを芽生えさせていくと考えている。

4. 気づくこと、そして考えること

様々なボランティアを行ううえで大切なこと、それは日頃から何が問題なのか、その理由、対処方法等、問題意識を持ち、自ら気づくことが大切である。

そして活動するにあたり、その先の出来事やその相手は必ず存在するので、次にどうなるか、この後どうするか、これから先のことを考え想像する力が大切である。

また相手の立場に立ってものを考え、善意の押し売りにならないよう気をつける。そして自分自身を磨き、その結果が他人のためになる場合もあることから、お互いのことを考え、互いに成長していけるよう努めることが重要である。

5. ふりかえること

若者の大半は、日常的にふりかえりをしたり、分析をしたり、再び体験をする学習の経験は少ない。また目標とするものや、その結果は受け入れるが、それまでのプロセスでどのような取組みがなされてきたかを改めて考える経験も少なくなっている。

しかしそのふりかえりを繰り返すことが、新たな気づきを生み、その対応についても学んでいくこととなる。

若者からも研修後に、「このように繰り返し体験する経験はなく、とても新鮮で大きな学びとなった」と話す者もあり、ボランティア・スピリットを育む一つの方法として体験学習のサイクルが存在している。

今回の研修においても、ある若者が、企画す

る中で気づいたことや問題になっていることを、自主的に仲間へ伝え検討し、それを繰り返すことで仲間との信頼関係を得てボランティアのグループ誕生に貢献した。

またある若者は、体験ブースの活動内容のリハーサルを繰り返し、問題点をあげ、再度ふりかえることで内容を精査し、イベントを成功に導いた。

更にある若者は、経験者であるゆえに先導役に徹していたが、研修を繰り返すうちに、自分の立場を見つめなおし、一步退いてサポート役にまわり、グループの円滑な活動に貢献した。どれも「体験」の繰り返しが生み出す、若者の成長を物語っている。

6. 今も昔も変わらないスピリット

研修では、目標となる「子どもフェスティバル」の体験ブースの成功を目標に、仲間と共に話し合い、悩み、解決に向けて取り組み、その中でボランティア・スピリットを育むことが研修の大きな目的であった。結果、無事イベントは終了したが、そのボランティア・スピリットは、すぐに芽生えるものでもなく、時を経て育んだその思いが、様々な行動となって、求められるボランティアに繋がっていく。



子どもフェスティバルの体験ブースの様子

時代が移り変わる中で、ボランティア・スピリットは、色あせることなく変わらず存在し続けて欲しいものである。

最後に当センターでは、平成 29 年度も同様の研修を実施する予定であり、新たに 2 つの若者を対象とした研修も実施する予定である。